

ブラックジャックセミナー

日時：2013年3月17日(日) 9:00～12:30
 対象：小学生・中学生
 共催：ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社

- 【プログラム】
- 手術縫合体験
 - 最新医療機器体験(超音波メス)
 - 内視鏡トレーニング体験
 - シミュレーター体験
 - 自動吻合器・縫合器体験

医師の仕事を体験することで、小学生および中学生の児童・生徒が医療に対する興味を持ち、生命の尊さを感じるためのイベント「ブラックジャックセミナー」が、去る3月17日に開催されました。

手術縫合の体験や内視鏡体験など、普通では体験できない医療の世界に触れることができ、参加した小学生、中学生は、皆、真剣そのもの様子で、セミナーに取り組んでいました。



各交通機関のご紹介

- JR舞子駅・山陽電車 舞子公園駅から
53・54系統 学園都市駅行 西岡橋停留所下車 徒歩5分
- 神戸市営地下鉄 学園都市駅から
53・54系統 舞子駅行 西岡橋停留所下車 徒歩5分
- JR垂水駅・山陽電車 山陽垂水駅から
2系統清水が丘行 清水が丘停留所下車



医療法人 薫風会 **佐野病院**

〒655-0031 神戸市垂水区清水が丘2-5-1
 TEL: 078-785-1000 FAX: 078-785-0077

編集・発行：地域医療連携室
 診療科目：内科、消化器センター（消化器内科・消化器外科・
 内視鏡治療・化学療法）、緩和ケア支援部門、整形外科、
 リハビリテーション科、婦人科、放射線科

URL: <http://www.sano-hospital.or.jp/>

理念 **医** 地域医療への貢献 患者さんの立場に立った医療
経 健全な経営 着実に前向きな病院の発展
倫 悔いなき職場 生活と人格の向上

- 方針
1. 私達は、患者さんの病を癒し、苦しみを和らげ、延命に努めることを誓います。
 2. 私達は、患者さんの人格・人権を尊重し、合意を旨とし、信頼に応えることを誓います。
 3. 私達は、法を遵守し、過誤を防ぎ、生涯、医の知識と技術の研鑽に励むことを誓います。
 4. 私達は、職員相互の職分を理解し、尊敬し、協力して患者さんの医療に当たることを誓います。

当院に関するお問い合わせ窓口 地域医療連携室(直通) TEL: 078-785-1306 / FAX: 078-785-1905

SANO HOSPITAL NEWS

125th

ANNIVERSARY

佐野病院125周年記念号

歴史の重さを感じながら 柔軟性のある病院経営を

佐野病院 院長 佐野 寧

2013年4月、佐野病院は125周年という節目の年を迎えました。このような長い歴史を刻むことができたのも、当院を支えてくださった多くの方のお力があったからであり、皆様に心より感謝申し上げます。

曾祖父の時代から続く病院の四代目という重責は当然感じていますが、私自身が院長となってからは、まだ6年しか歴史を重ねておりません。そのため、過去を振り返るといっても、過去三代の院長が築いてきた歴史を、自分がどのようにつないでいくべきか、未来への想いの方が強いというのが正直なところです。まだ始まったばかりの私と病院の歴史ですが、今までより一歩進んだ佐野病院を作るべく、1日1日を大切に積み重ねたいと思っています。

私は2006年の医療制度改革と時を同じくして国立がんセンターから当院に着任しました。医療制度の変化によって、今までの経営方針が通用しなくなった時期に院長に就任したのは、病院改革

が私の使命だったからではないかと感じています。地域の総合病院から最先端の消化器がん専門病院へ。今まで経営の経験があるわけでもなく、本格的に勉強をしたわけでもなく、この大転換が良い方向へ進むのかどうか、正直確信などありませんでした。案の定、方針転換は非常に苦難を伴うものでしたが、今、ようやく消化器がん専門病院として多くの人に認知いただけるようになり、進むべき道は正しかったと感じています。ただ、ここまで来るまでには、本当に多くの方にご迷惑をお掛けしました。それと同時に、本当に多くの方に助けていただきました。そのすべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

佐野病院は、大きく変わりました。しかし、これで終わりではありません。この先もどんどん変化していくと思いますし、変化させなければいけません。今までの6年間は、新しい佐野病院の基盤づくりの時間だったと考えています。今後は出来上がった基盤を活かして、さらに上のステージに上がっていきたくと思っています。そのためには、時代の流れを敏感に汲み取りながら、臨機応変な舵取りが必要です。現在は、iPS細胞などの研究も進んでおり、がんの治療方法が根本から変わる可能性もゼロではありません。そのような状況になった時でも、柔軟性を持ち合わせていれば、状況に合わせた変化が可能で、佐野病院の歴史をさらに積み重ねていくためにも、時代に対応できるしなやかな病院経営を追求していきたいと考えています。



「熟慮」・「決断」・「実行」を 積み重ね、歩んだ125年

民間病院としては、他に類を見ない長い歴史を刻んできた佐野病院。

明治・大正・昭和・平成という変化する時代の中で、常に患者様のためになる医療を追求し、今に至ります。

その年月の中で、三代院長として長年病院とともに歩んでこられた会長・佐野 馨先生に、125周年を迎えた今、その想いをお聞きしてみました。

125年の重みと責任

佐野病院は、現在の院長で四代目。実に125年という長い歴史を持つ民間病院です。佐野病院としての歴史は、初代院長で、私の祖父である佐野 寛から始まるわけですが、その誉の父であり、私の曾祖父にあたる佐野 寛道がすでに漢方医であることから、佐野家医学の系譜は、江戸時代から続くものです。



佐野 寛道(1830~1892)

ドイツ語を猛勉強の末、東京大学医学部の前身である「東京医学校」に入学し、当時日本で最先端とされていたドイツ医学を学び、病院設立に尽力した初代院長・佐野 寛。戦禍により、家も病院もすべてを失いながら、二年余で生田区の焼け跡に佐野病院の再建を果たした二代院長・佐野 実。そして、三代院長である私と、現院長であり、四代院長となる佐野 寧。この四代にわたる佐野病院の歴史は、激変する

時代の中で、常に困難に遭遇しながらもそれを乗り越え、大変多くの人の力を借りながら、病院が守られてきたことを物語っています。私の父、二代院長・佐野 実の言葉を借りれば、まさしくタイトルの通り「熟慮」・「決断」・「実行」を積み重ねた125年であったといえるでしょう。

私は、民間病院でこれだけ長く続いている病院を他に知りません。日本史学会の会長に尋ねても、125年続く民間病院は知らないとのことのお返事でした。アメリカ・ミネソタ州の総合病院で、全米で最も優れた病院のひとつに数えられているメイヨー・クリニック (Mayo Clinic) が、当院と同じ年に設立されたことを知り、ますます、その歴史に誇りを感じています。そして、125年もの長きにわたり、佐野病院を陰で支えてくださった関係者の皆様、患者様からいただいた厚い信頼、そして、職員の努力と精励にあらためて感謝するとともに、今後も誠実に医道をまっとうすることが、私たちに課せられた使命だと感じています。

垂水と佐野病院

佐野病院は、1888年、神戸市中央区で産声をあげました。病院経営は順調でしたが、1945年、二代院長・実の時代に神戸空襲に遭い、病院は全焼。その後、大変な苦労を経て病院は再建されましたが、当時の

佐野病院 会長(三代院長)
佐野 馨



戦前(昭和10年)の佐野病院(現在の神戸市中央区鯉川筋)

神戸市は中心市街地の人口が減少し、郊外の人口が増加するドーナツ化現象が進行していました。病院周辺の夜間人口は急激な減少傾向にあり、このまま神戸市の中心地で病院を経営することは、非常に困難な状況でした。このような社会情勢の中で病院の存続を模索した結果、私が院長となった時に、病院の移転を決断したのです。

病院を移転した垂水は、もともと佐野家の別荘があった土地です。私も小さい頃、垂水の海岸で海水浴を楽しんだ記憶があります。また、現院長の寧も含め、歴代院長は、皆釣り好きであり、二代目院長も垂水から淡路辺りまで船を出し、よく釣りを楽しんでいました。そういう背景から、垂水は佐野家にとって、非常に親しみのある土地柄だったということがあります。

ただ、当時の清水が丘は、神明高速道路が東西に通じ、多聞団地や明舞団地が開かれていたとはいうものの、県警宿舎がポツンと建つのみで、まるで荒野の中に拓かれた隔絶地のような風景が広がっていました。本当にこんな場所に患者様が集まるのだろうかと思いましたが、これから人口増加が見込まれること、また、団地と医療機関の密接な関係が叫ばれ始めていた時期ということもあり、この清水が丘の土地を購入すると決断しました。

当時の垂水の医療環境は、舞子台病院があるだけで、他に目立った医療機関はありませんでした。幸い、1970年に佐野病院

が建設されてから、周辺には年々住宅、公舎、マンションが建設され、あっという間に人口が増えていきました。人々の暮らしに医療は欠かせないものです。その意味からも、佐野病院の存在は、地域の人々に安心感を与えることができたのではないかと、今、あらためて感じています。



昭和45年 竣工時の佐野病院と清水が丘周辺

総合病院への歩みと時代の変化

垂水・清水が丘での佐野病院は、内科、外科、産婦人科、小児科、整形外科の5つの診療科からスタートしました。

当時、清水が丘の団地には、若い人々が多く転入していました。このため、今後は子どもを出産できる施設が必要になると感じ、移転当初から産婦人科の設置を決めていました。また、当時地域の皆さんが求めていたのは、どんな病気になっても診てもらえる、地域のかかりつけ医としての役割でした。

これらのニーズを満たすため、私が目指したのは、一つの病院で幅広い診療や治療を行うことができる「地域の総合病院」でした。1971年には、それまでパート職員による診察を行っていた整形外科を、常勤体制としました。続いて、1978年には耳鼻咽喉科、1982年には眼科を設置。こうして自分の目指す総合病院としての形を徐々に整えていきました。



創立100周年当時の佐野病院(昭和63年4月)

総合病院として地域に根づいていった佐野病院ですが、中でも評判になったのが産婦人科です。従来の産婦人科の常識を覆す、3人の婦人科医がチームを組んで行う「グループ診療」を取り入れ、出産や緊急手術が重なった時にも対応できる体制を

整えました。これが地域の方に受け入れられ、佐野病院への信頼度はますます加速していったように感じています。

施設も年々充実し、職員数も増えていった佐野病院ですが、やはり時代の流れにより方向転換を余儀なくされたこともあります。一番心を痛めたのが、佐野病院の名前を広める原動力であった産科を廃止せざるを得なくなったことです。

1992年には分娩件数1万件を達成。北館5階を改修し、「ばーすセンター」を設置するなど、佐野病院の看板ともいべき産科でしたが、医療の世界では、産婦人科がどんどん消滅していく時代に入っていました。佐野病院の産科はグループ診療を行っていたため、婦人科医の確保は死活問題でもありました。その婦人科医が激減したことで医師の確保が不可能となり、グループ診療はとてつ続けられない状況に陥りました。今となっては時代の流れであり、避けられなかったこととはいえ、当時は患者様が大変申し訳なく、胸が締め付けられるような毎日だったことを思い出します。

未来への道のり

125年という年月を振り返ると、人々を取り巻く医療環境や疾患の種類も大きく変化しています。二代院長の頃は、結核が不治の病といわれていた時代です。私の時代になると、結核は簡単に治療できる時代になり、また患者も激減しました。それに代わり、急増していったのががんや心疾患です。また、AIDS(後天性免疫不全症候群)など、人類がこれまでに経験したことのない新しい病も現れました。そして今、人々を最も苦しめている病気の代表格が、がんといえるのではないのでしょうか。

こういった変化に対応するため、佐野病院は四代院長が就任してから、また大きく形を変え、前進を続けています。現在最も多くの死亡者を出す病気であるがん。中でも急増している大腸がんをはじめとする消化器がんの専門病院として、大きく方向転換がなされました。

病気が変化すれば、患者様が病院に求める役割も違ってきます。その時代の変化に柔軟に対応することも、病院が存続していくための条件といえるのではないのでしょうか。

ただ、時代がいくら変わっても、変わら



腹腔鏡を使った手術の様子

ないものもあります。それは、長年佐野病院に通い続けておられる患者様です。

佐野病院は歴史が長いから、地域の多くの方が診察を受けた経験があると思います。また、産婦人科があったことから、たくさんの方の命も誕生しました。これらの患者様の中には、私が若い頃に診察していて、高齢者となった今も通い続けてくれる方、佐野病院で誕生し、大人になっても通院されている方、清水が丘に移転する前の中央区に病院があった時代からずっと通っていただいている方など、長年にわたり佐野病院を愛してくださる患者様や親子二代のお付き合いとなる患者様もいらっしゃいます。

また、患者様にいい医療を提供したいと願う佐野病院スタッフの姿勢と心。これも変わらないものの一つだと思います。私は佐野病院の職員として決して忘れてはいけない心得を「私たちの誓い」としてまとめました。

- 1) 私たちは、病を癒し、苦しみを和らげ、延命に努めることを誓います。
- 2) 私たちは、患者さんの人格・人権を尊重し、合意を旨とし、信頼に応えることを誓います。
- 3) 私たちは、法を遵守し、過誤を防ぎ、生涯、医の知識と技術の研鑽に励むことを誓います。
- 4) 私たちは、職員相互の職分を理解し、尊敬し、協力して患者さんの医療に当たることを誓います。

この4つの誓いは、医療の形がいくら変わろうとも、医療者として不変の思いではないのでしょうか。

長年にわたる患者様の病院に対する信頼。また、医療者の患者様を思う心と医療への使命感。この2つは、時代や医療環境が変わろうとも、ずっと変わらず存在する佐野病院の宝ではないかと感じています。この宝を大事にしなが、これからの佐野病院の歴史を積み重ねてほしいと、125周年にあたり、切に望みます。

The History of SANO Hospital

この記録は、次の出版物より引用しています。
「佐野 馨 回想録」 佐野 實 著(佐野 豊・佐野 馨 改訂)
「佐野病院 百年の歩み」 佐野 馨 著
「佐野病院 百二十年の歩み」 佐野 馨 改訂

夜明け前 初代病院長 佐野 馨

1856年(安政3年) 佐野 馨、伊豆の宇久須に生まれる
1885年(明治18年) 東京大学医学部卒業(同期生17名)
神戸医学校へ赴任、解剖学と婦人科学の教鞭を執る
1887年(明治20年) 神戸医学校廃校
1888年(明治21年) 佐野 馨、病院を創設。初代病院長に就任(神戸市生田区北長狭通四丁目)
1895年(明治25年) 大改装
1907年(明治40年) 耳鼻科新設
1921年(大正10年) 佐野 実(後の第二代病院長)、ドイツへ留学
1922年(大正11年) F・ヘルテル博士 大阪医科大学赴任中、佐野病院にて本邦初の開胸術を行う



開院当時の診療室(右端が馨)



東京大学医学部卒業写真(前列の左から2番目が馨×印)



初代病院長 佐野 馨(1856~1940)(在任期間1888~1924)

1983年(昭和58年) 神戸看護専門学校実習病院指定
日本整形外科学会研修施設認定
児童福祉施設(第一助産施設)設置認可
全身用CT導入
1986年(昭和61年) 婦長・課(科)長制度導入
増改築(173床)
各病棟にナース・ステーションを設置
1987年(昭和62年) 日本産婦人科学会研修施設認定
1988年(昭和63年) 現在の病院用地を取得(1,698.00㎡)
創立100周年記念式典(於神戸国際会議場)
創立100周年祝宴(於神戸ポートピアホテル大輪田の間)
佐野 馨、「佐野病院 百年の歩み」を著す
1991年(平成3年) 病院増設用地を取得(859.43㎡)
1992年(平成4年) 神明メディカル開設用地を取得
基準看護特二類認可
1993年(平成5年) 在宅訪問看護実施
分娩件数10,000件到達
1994年(平成6年) 神明メディカル竣工、調剤薬局兵庫県承認
1995年(平成7年) 「清水が丘調剤薬局」開設
人工透析室増床(13床)
大腸拡大(100倍)内視鏡システム及び十二指腸内視鏡システム導入/心エコー開始
1997年(平成9年) 新館竣工、診療開始/旧館(南館)改修・竣工
併設型介護老人保健施設開設許可/老健施設「メイン・レーベン」開設
人工透析室増床(21床)
新看護2.5:1(A) 10:1認可
1999年(平成11年) 立体駐車場完成
6階、「職員食堂」「売店・喫茶室」開設
「在宅支援センター」開設
老健施設「メイン・レーベン」、通所定員20名に増員
2000年(平成12年) MRI導入(AIRIS-II comfort 日立メディコ製)
2001年(平成13年) (財)日本医療機能評価機構認定(一般A)
2002年(平成14年) 患者様向け院内託児所開設、患者様送迎サービス開始
助産科新設(後に、助産師分娩科に改名)
2003年(平成15年) 佐野サナトリウム、神戸市中央区から西区に移転、「新生病院」に改名
2004年(平成16年) 水中分娩室設置
オーダリングシステム稼働
「西脇まちの保健室」開講(於西脇地域福祉センター)
2005年(平成17年)



消防訓練(昭和58年9月9日 救急の日)



清水が丘調剤薬局(平成7年1月)



佐野病院新館 完成(平成9年2月)



MRIの導入 AIRIS-II comfort(日立メディコ製)



メイン・レーベン開設(平成9年8月)

病院の継承 二代病院長 佐野 実

1924年(大正13年) 佐野 実、第二代病院長に就任
1936年(昭和11年) 増改築(45床)
1937年(昭和12年) 創立50周年を祝う
(於オリエンタルホテル)
佐野 馨、「回想録」を著す
1940年(昭和15年) 佐野 馨、永眠
神戸空襲にて病院全焼
1946年(昭和21年) 神戸市垂水区にて内科診療所開業
1947年(昭和22年) 神戸市生田区にて内科有床診療所を新築
1955年(昭和30年) 外科新設、50床の病院として再発足
1957年(昭和32年) 増改築(70床)
1959年(昭和34年) 佐野 馨(後の第三代病院長)、アメリカへ留学
1960年(昭和35年) 精神神経科新設
増改築(77床)
医療法人「実風会」設立
佐野 実、医療法人「実風会」理事長に就任
1961年(昭和36年) 佐野サナトリウム設立
宮軒 富夫、佐野サナトリウム病院長に就任
1966年(昭和41年) 佐野サナトリウム増改築(127床)



昭和35年 増改築時の佐野病院



佐野サナトリウム病院長



二代病院長 佐野 実(1888~1976)(在任期間1924~1970)



昭和36年 創立時の佐野サナトリウム

更なる発展 三代病院長 佐野 馨

1970年(昭和45年) 神戸市中央区から垂水区(現在の所在地)に移転
佐野 馨、第三代病院長に就任
産婦人科・小児科新設
1971年(昭和46年) 佐野サナトリウム増改築(219床)
整形外科新設
1973年(昭和48年) 職員宿舎完成
創立85周年を祝う(於相楽園)
1975年(昭和50年) 院内保育園開設
人工透析開始
1976年(昭和51年) 佐野 実、永眠
医療法人「実風会」に改組
佐野 馨、医療法人「実風会」理事長に就任
宮軒 富夫、医療法人「実風会」理事長に就任
1978年(昭和53年) 創立90周年を祝う
有限会社神明メディカル設立
増改築(161床)
人工透析室拡充
耳鼻咽喉科新設
1979年(昭和54年) 教育委員制度発足
コンピューターシステム導入
基準看護一類認可
1980年(昭和55年) 教育主任制度発足
基準看護特一類認可
1981年(昭和56年) 基準看護特二類認可
1982年(昭和57年) 眼科新設



創立85周年記念式典(昭和48年) ※写真左から馨、豊、勇、(父・実)、母・郁子



次兄 佐野 豊(1926~) 元京都府立医科大学学長 「勲二等瑞宝章」受賞(平成13年)



長兄 佐野 勇(1924~1975) 元大阪大学精神科教授 「勲二等瑞宝章」受賞(平成13年)



三代病院長 佐野 馨(在任期間1970~2007)

先進医療への取り組み 四代病院長 佐野 寧

2006年(平成18年) 佐野 寧、着任
1階、「佐野病院 消化器センター」開設(通院がん治療室併設)
NBI内視鏡ビデオシステム及びマルチスライスCT導入
2007年(平成19年) 5階、「ばーすセンター」開設
佐野 寧、第四代病院長に就任
2008年(平成20年) 佐野 寧、医療法人「実風会」理事長に就任
佐野 馨、医療法人「実風会」会長に就任
日本消化器内視鏡学会専門医指導施設
日本消化器病学会専門医制度関連施設
日本がん治療認定医機構認定研修施設
佐野 寧、Kiss-FM番組「ホームドクター」出演開始
2009年(平成21年) 佐野 互、着任
CRマンモグラフィシステム(コニカミノルタ製)導入
産科・助産科の閉鎖(約40年間の分娩総件数は20,113件)
2010年(平成22年) 婦人科「切らない筋腫治療センター」開設
人工透析患者様送迎サービス開始
1階、消化器センター外来新設
5階、消化器センター病棟リニューアル工事・稼働
「内視鏡的大腸腫瘍粘膜下層剥離術(先進医療 通称:ESD)」の認定医療機関(兵庫県初)
佐野 馨、「佐野病院 百二十年の歩み」改版
2011年(平成23年) 3階・4階、病室リフォーム工事
2012年(平成24年) 3階・4階、フロアリニューアル工事
6階、透析室リフォーム工事



消化器センター開設(平成18年)



マンモグラフィーの導入 REGIUS PUREVIEW(コニカミノルタ製)



四代病院長 佐野 寧(在任期間2007~)



NBI内視鏡ビデオスコープシステム(オリンパス製)



副院長・放射線科部長
一柳 明弘 (勤務年数28年)



看護部長
上村 美枝子 (勤務年数41年)



事務部長
見須 範人 (勤務年数29年)

これからも、この先も、 患者さまのための医療を

さまざまな変化を経て、125年の歴史を重ねてきた佐野病院。125周年という節目の年を迎え、その変わりゆく姿を長年にわたり見つめ続けてこられた職員の皆さんに、あらためて佐野病院についての想いをお聞きました。これまでの経験から感じる佐野病院の良さ、そして、これからの佐野病院に期待すること…。それぞれの立場から見える病院の姿を重ね合わせたとき、125年の中で培われた佐野病院の伝統が、浮かび上がってきました。

病院が125周年を迎えたことについて、 率直な想いをお聞かせください。

一柳 一言で表現するなら「感謝」ですね。民間病院でこれだけ長い歴史のある病院は他に無いと思います。そんな伝統ある病院で、長年勤務させていただいていることに、心から感謝したいと思います。

上村 あらためて125年と考えると、民間病院でこれだけ長く続いていることが夢のようであり、少し不思議な感じすらしています。

見須 100周年から125周年までの25年間は、本当にあっという間でした。じっくり振り返ると長い年月かもしれませんが、自分の中では、あっという間に25年が過ぎたというのが、率直な感想です。

毎日の仕事の中で、125年の長い伝統を 感じる場面はありますか？

一柳 私は現在の会長に医師として育てていただきました。その会長から、四代院長にバトンタッチされたわけですが、お二人に共通するのは、この人についていきたいと思える「人間としての魅力」です。タイプは違いますが、それぞれに大変尊敬できる部分をお持ちです。恐らく、歴代の院長は皆さん、お二人と同じように人を惹きつける魅力を持っておられたのではないで

しょうか。

上村 私は、根本にある医療の考え方に佐野病院の伝統を感じます。病院の方向性は大きく変わりましたが、三代院長、四代院長ともに「患者様の立場に立った医療」を最も大事にしておられます。それが、佐野家に代々受け継がれてきた医療人としての心得ではないかと感じることがあります。

見須 いい医療へのこだわりは、間違いなく受け継がれていると思います。江戸時代から医療に関わってこられた重みともいえるのでしょうか。佐野病院の根底には、医療を追求する姿勢や純粋さのようなものが流れている気がします。

時代の流れとともに、佐野病院の方向性 にも大きな変化が起こっています。その ことについて、どう感じておられますか？

一柳 2006年は医療制度改革などの影響もあり、病院にも方向転換が必要だと、誰もが感じていた時期でした。そのタイミングで、四代院長が就任され、消化器疾患に特化するという方向性を打ち出されたことで、私は、非常に安心感をもつことができました。

それとは逆に、国立がんセンター出身で、非常にレベルの高い優秀なドクターと一緒に仕事をする事になり、相当なプレッシャーを感じたことも事実です。た

だ、病院の方向性に間違いは無いと思っていましたので、知識・技術のレベルを上げるために、自分なりに努力はしてきたつもりです。

上村 私が勤め始めた頃の佐野病院は、1度でも診察したことのある患者様からの診察依頼は、夜間であろうが休日であろうが断らないというポリシーのもと、地域医療を担う総合病院としての役割を果たしていました。それが四代院長の就任とともに、消化器に特化した専門病院として、病院の役割が大きく変化しました。専門的でオリエティの高い医療がメインとなりましたので、当然、看護にも専門性が求められました。

ドクターからの要求も高くなり、最初は衝突もありました。でも、今のままではいけないという思いを、私はもちろん、師長をはじめ、看護スタッフ全員が持っていましたので、院外研修に積極的に参加したり、ドクターの協力のもと院内研修を開催するなど、看護部全体の専門性を深める努力をしてきました。



見須 私も、病院としての方向転換は、正しい選択だったと思います。2006年の医療制度改革によって、国の財政が困窮する中で医療費が圧縮され、今までと同じやり方では、病院の存続が難しい時代になりました。広く浅くではなく、狭く深い医療。患者様のニーズから考えても、こちらの方向に進んでいくべきというのは明白でした。

医療制度改革だけでなく、情報過多時代となり、インターネットを使えば多くの人が治療、薬、検査などについてかなり詳しい知識を持つことができます。当然病院には、それ以上の知識と技術が求められますので、専門特化の方向に進まなければ、患者様を満足させることができなくなっていたと感じます。



一柳 院長、小高先生、蓮池先生を筆頭に、当院には国内トップクラスのドクターがそろっています。消化器がんの治療において、日本の医療界を引っ張るメンバーですので、当然学会発表や研究への参加、講師依頼など、院外での仕事も多忙を極めておられます。

それらの活動を支えるためには、私たちがしっかりと病院の土台を支えることが必要だと感じています。何の心配もなく、佐野病院という名前を背負って大きな舞台へ出ていけるように、できる限りバックアップしていきたいと考えるようになりました。

上村 看護部でも、専門知識を深めることに加えて、スタッフのモチベーションを上げるために、勤務体制の改革にも取り組むようになりました。院長は、肉体と精神のケアが看護の質に関わるという考え方をもちです。質の高い看護を提供するために、より身体の休息と精神のケアを図ることができる勤務体制へと、改善を進めています。

また、できるだけ長く勤務していただくために、出産・子育てに対応しやすく、ライフスタイルに合わせた看護体制についても、高い意識を持つように心がけています。自分自身の経験も活かして、出産や子

育てに関して柔軟に対応できる職場環境を作っていきたいと考えています。

見須 事務長の立場から見ると、専門性が高まったことによって、外来患者数、入院患者数、職員数など、病院がコンパクト化していると感じます。その分医療の質はぐっと濃くなり、すべてにおいて、広く浅くから、狭く深くに変化しています。

事務局が取り扱う医療の材料や薬品などについても、今まで以上に専門的で、深い知識が必要になってきています。さまざまな面で病院はどんどん変化していますので、私たち職員も、それに合わせた勉強や、新しい知識を増やすことが必要だと感じています。

今後も病院が長く続いていくために、 どんなことが必要だと感じますか？

一柳 やはり、トップである院長のビジョンがしっかり定まっていることが大事ではないでしょうか。そして、そのビジョンを私たち職員がしっかりと理解し、それに合わせて行動できるかどうかだと思います。

上村 私は、看護師である前に人間であることを忘れないでほしいと、常々口にしています。病院は、単に治療を行う場所ではなく、医師・看護師とも感性を磨くことで、患者様のつらい気持ちを少しでも楽にしたり、癒したりできる場所だと思います。そういった医療人としての感性を磨くことが、病院として歴史を重ねることにつながるのではないのでしょうか。

見須 今の方向性をしっかりと維持して、まずは技術力を上げていくこと。次に、患者様に満足していただける施設を整備すること。最後に医師、看護師をはじめ、われわれ職員のサービスの提供方法。この3つを追求していくしかないと思います。職員全員が、それぞれの立場でこの3点を追求していくと、必然的に患者様の満足度が上がり、地域に愛される病院として、今後も

長く続いていくのではないのでしょうか。

一柳 地域の開業医との信頼関係も、大変重要だと思います。佐野病院のビジョン、院長の考え方などを、より多くの開業医の先生にご理解いただくことで協力が得られます。長年築いてきた私の人間関係を活かして、開業医の先生方にも積極的に働きかけていきたいと思っています。



見須 それは私も感じています。私たちの医療は、近隣の先生方から検査や手術の依頼があって、初めて成り立ちます。また、いつも院長がおっしゃっていますが、職員が同じビジョンを持ち、思いを一つにすることも大切だと思います。

上村 開業医の先生方と同じように、地域の方々にも当院のことを理解していただくよう、今まで院外で行っていた健康教室を、去年の4月から院内で実施するようになりました。参加者も回を追うごとに増えていて、現在は40~70名という多くの方が参加されています。病院に足を運んでいただく機会を増やすことも、大事なことだと思います。

一柳 私が今一番幸せなのは、家族、友人、知人が、胃がんや大腸がんを患うことがあれば、当院での診察・治療を自信を持って薦められることです。民間の中小病院でありながら、本当に尊敬できるドクターと共に仕事ができ、自分の病院に誇りを持つことに、大変感謝しています。

125周年を迎え心も新たに、職員が力と心を合わせて、本当に患者様に喜んでいただける医療を提供するため、邁進していき

